武蔵野日曜聖書講筵　降誕節祈祷会
わが祈願
――ヘブル書第11章1～20節――

１９９２年12月20日
小池辰雄

見ぬ物を真実とする　即本願　新天新地に対する大希望　キリストの中に信じ入ると力がくる

【ヘブル11】

1それ信仰は望むところを確信し、見ぬ物を真実とするなり。2古えの人は之によりて証せられたり。3信仰によりて我等は、もろもろの世界の神の言にて造られ、見ゆる物の顕るる物より成らざるを悟る。4信仰に由りてアベルはカインよりも勝れる犠牲を神に献げ、之によりて正しと証せられたり。神その供物につきて証し給えばなり。彼は死ぬれども、信仰によりて今なお語る。5信仰に由りてエノクは死を見ぬように移されたり。神これを移し給いたれば見出されざりき。その移さるる前に神に喜ばるることを証せられたり。6信仰なくしては神に悦ばるること能わず、そは神に来る者は、神の在すことと神の己を求むる者に報い給うこととを、必ず信ずべければなり。7信仰に由りてノアは、未だ見ざる事につきて御告を蒙り、畏みてその家の者を救わん為に方舟を造り、かつ之によりて世の罪を定め、また信仰に由る義の世嗣となれり。8信仰に由りてアブラハムは召されしとき嗣業として受くべき地に出で往けとの命に遵い、その往く所を知らずして出で往けり。9信仰により異国に在るごとく約束の地に寓り、同じ約束を嗣ぐべきイサクとヤコブと共に幕屋に住めり、10これ神の営み造りたもう基礎ある都を望めばなり。11信仰に由りてサラも約束したもう者の忠実なるを思いし故に、年邁ぎたれど胤をやどす力を受けたり。12この故に死にたる者のごとき一人より天の星のごとく、また海辺の数えがたき砂のごとく夥多しく生まれ出でたり。

13彼等はみな信仰を懐きて死にたり、未だ約束の物を受けざりしが、遙にこれを見て迎え、地にては旅人また寓れる者なるを言いあらわせり。14斯く言うは、己が故郷を求むることを表すなり。15若しその出でし処を念わば、帰るべき機ありしなるべし。16されど彼らの慕う所は天にある更に勝りたる所なり。この故に神は彼らの神と称えらるるを恥とし給わず、そは彼等のた

めに都を備え給えばなり。
17信仰に由りてアブラハムは試みられし時イサクを献げたり、彼は約束を喜び受けし者なるに、その独子(ひとりご)を献げたり。18彼に対しては『イサクより出づる者なんじの裔(すえ)と称えらるべし』と云い給いしなり。19かれ思えらく、神は死人の中より之を甦えらすることを得給うと、乃(すなわ)ち死より之を受けしが如くなりき。20信仰に由りてイサクは来らんとする事につきヤコブとエサウとを祝福せり。

●見ぬ物を真実とする

1それ信仰は望むところを確信し、見ぬ物を真実(まこと)とするなり。

素晴らしい言葉です。この召団はそのような光と喜びと愛の現実となります。それを私はこのヘブル書11章の、

「それ信仰は望むところを確信し、見ぬ物を真実とするなり」

というこの言葉に即して考えております。

2古(いにし)えの人は之によりて証せられたり。3信仰によりて我等は、もろもろの世界の神の言にて造られ、見ゆる物の顕るる物より成らざるを悟る。

「神の言」が発すれば、ただちにそれが現実となる。キリストがそうでした。それを

「言は成る」

という、キリストの御言は

「誠(まこと)」

である。

「わが言は霊なり、生命なり」

という。意味の世界ではない。実力の世界です。行為に裏付けられない言葉は空しい。ただ

「信仰のみ、信仰のみ」

といって、信仰が観念化したらどうにもならん。そんなことではない。聖書の現実は凄いです。神の言は、

「光あれと言い給いければ、光ありき」

という。とにかく、キリスト様の現実は凄いんだ。だからもう、福音書を読んで、しょっちゅう驚嘆驚倒して読んでいきます。その現実に自分を投げ込んでいく。註解も何も要らん。御言はもの凄い力を持っているから。もう簡単ですよ、我々の本当の信の世界というのは。何もゴタゴタは要らん。簡単明瞭です。

4信仰に由りてアベルはカインよりも勝れる犠牲(いけにえ)を神に献げ、之によりて正しと証せられたり。神その供物(そなえもの)につきて証し給えばなり。彼は死ぬれども、

信仰によりて今なお語る。

これは、アベルは私心無きところの本当の讃美をもって、感謝をもって捧げた。ところが、カインの方は心が濁っていた。だから、ダメなんだ。

5信仰に由りてエノクは死を見ぬように移されたり。神これを移し給いたれば見出されざりき。その移さるる前に神に喜ばるることを証せられたり。

エノクとエリヤだね、天界にいきなり往ってしまったのは。もちろん、キリスト様はいきなり往けたんだ。ただ、十字架に架かる贖罪の大仕事があったので、それから昇天なさったけれども。ここにみんな、

「信仰により、信仰により」

と書いてある。

6信仰なくしては神に悦ばるること能わず、そは神に来る者は、神の在すことと神の己を求むる者に報い給うこととを、必ず信ずべければなり。7信仰に由りてノアは、未だ見ざる事につきて御告を蒙り、畏みてその家の者を救わん為に方舟を造り、かつ之によりて世の罪を定め、また信仰に由る義の世嗣となれり。8信仰に由りてアブラハムは召されしとき嗣業として受くべき地に出で往けとの命に遵い、その往く所を知らずして出で往けり。

そして、アブラハムは導かれた。アブラハムは「信仰の祖」といわれる。

9信仰により異国に在るごとく約束の地に寓り、同じ約束を嗣ぐべきイサクとヤコブと共に幕屋に住めり、……11信仰に由りてサラも……

云々と、ずっと書いてあります。

17信仰に由りてアブラハムは試みれらし時イサクを献げたり、彼は約束を喜び受けし者なるに、その独子を献げたり。

ただ一人の息子を献げるということになってしまった。分からんです、神様のこの命令は。けれども、無条件に従った。

18彼に対しては『イサクより出づる者なんじの裔と称えらるべし』と云い給いしなり。

と言ったのにさ、「それを献げろ」と言うんだ。

19かれ思えらく、神は死人の中より之を甦えらすることを得給うと、乃ち死より之を受けしが如くなりき。20信仰に由りてイサクは来らんとする事につきヤコブとエサウとを祝福せり。

もう無条件の世界です。神様の言葉を無条件に受けとる。理屈が先に立つ人はダメなんです。

●即本願

ヘブル書11章1節が凄い。

「信仰は望むところを確信し、見ぬ物を真実とするなり」

と。今日は「わが祈願」と書きましたが、いわゆる「わが」ではない。聖霊がたもうところの本願に即しようとするのが祈願なんです。即本願です。それでなければ、本当の祈願にならない。ということは、己の祈願を棄てることです。絶願することです。初めは、願を持ってたってもいいですよ、願を持っていてもいいけれども、それにこだわっていたらダメなんだ。そうすると、ここに本当の祈願がでてくる。即本願のところです。これが、

「御意（みこころ）を成させたまえ」

というキリストの祈りです。

「どうぞ、この私をお使いください」

というのが、「御意を成させたまえ」のキリストの祈りです。挺身している祈りです。主さまは神様に挺身している。だから、

「わが願いにあらず、汝の御意を」

と言ってらっしゃる。

「わが願いにあらず、本願の成ることを」

と。本願にキリストは全托すると、キリストはもの凄い力がくる。そこで、そこに成就する。もう本当に簡単なんだ。そのかわり、火がでるような現実だから、そこには本当の力がくる、生命がくる、悦びがくる。

来年の1月10日から変わってしまうと、私は信じています。いや実に、今日からもう変わってしまっているんです、内側は。あなた方がそういう気持で受けとっていらっしゃるから。だから、このクリスマスは素晴らしい…（異言）…。そういう世界です。

「望むところを確信し、見ぬ物を真実とするなり」

です。絶願すると、本当の本願に即した祈願がでてくる。これは、キリストの中に祈り入ることです。他は何も要らん。

賀川さんは棄身（すてみ）で伝道した人です。素晴らしいひとです。人真似はいりませんけれども、棄身というこの態勢は大事なことです。キリストは完全に神様の中に棄身していたひとですから。だから、力がきた。

「私の信仰は…」

なんて、

「自分の信仰」

を考えているうちは、いつまでたってもダメです。そんなものは要らん。それが

「絶信の信」

という世界です。だから、新約聖書は凄いんだ。どこを読んでもビリビリする。

そういうキリスト召団である。烈々たるものがくる。うれしくてしょうがない。ヘブル書11章を私が読んだのはその意味なんです。

13**彼等はみな信仰を懐きて死にたり、未だ約束の物を受けざりしが、遙(はるか)に**
これを見て迎え、地にては旅人また寓(やど)れる者なるを言いあらわせり。14**斯く**
言うは、己が故郷(ふるさと)を求むることを表すなり。15**若しその出でし処を念(おも)わば、**
帰るべき機(おり)ありしなるべし。16**されど彼らの慕う所は天にある更に勝(まさ)りたる**
所なり。この故に神は彼らの神と称えらるるを恥とし給わず、そは彼等のた
めに都を備え給えばなり。

●新天新地に対する大希望

新天新地の都、終末の希望、歴史の終りの新天新地に対する大希望を頂いて、生きるわけです。でなければ空しい。これは黙示録に書いてある。19章あたりから終りが凄いところです。

「視よ、神の幕屋、人と偕にあり」（黙示録21・3）

というところ。まぁ、大変な世界だな、聖書の現実というのは。想像を絶するところの凄いところだ。その黙示録の終りの方の、

「都は日月の照すを要せず、神の栄光これを照し、羔羊(こひつじ)はその燈火(あかり)なり。」（黙示録21・23）

とある。そういう新天新地に対する大希望です。地上の生涯は何年だっていいよ。もう既に、キリストを頂いている人は、永遠の生命がきているんですから、死んでも死なないわけです。新天新地の予表が既にきている。徴になっている。

今日、「徴(しるし)」という言葉を教わったのは大事なことだね。「セイメイオン」（ギ）、「オーツ」（ヘ）という。皆さんはみんな

「キリストの徴」

です。祈り入ると徴になる。クリスチャンというのは徴だ。クリスチャンなんていう言葉は少しまだるっこい。

「徴ならざる者はキリスト者にあらず」

と、パウロはそこまでは言ってないけれども。

「聖霊を宿さざる者はキリスト者にあらず」

と、パウロがロマ書で言っている。それが、私たちが今日は徴にされた。キリストの徴にされた。

「なかなか徴になりません」

ではないですよ。平伏してキリストの中に祈り入れば、徴にされるんです。成るのではない。大変ありがたい。我々の祈願はこのキリストの徴たること。これが祈願の内容です。だから、

今のヘブル書のように、

「信仰は望むところを確信し、見ぬ物を真実とするなり」

だ。この徴の世界を本当に頂いてしまう。

祈りは一つも理屈は要らん。一番簡単な祈りは、

「主さま！、アーメン！」

で、それでいい。とにかく、キリストに祈りかかったら、力がくる。それが本当の祈りの世界です。キリストの生命の現実の中に入る。まぁ、大変な方だね、本当にイエスという方は。

●キリストの中に信じ入ると力がくる

「恵福（さいわい）なるかな、霊の貧しき者。天国はその人のものなり」

という、キリストのこの第一言が一番素晴らしい。その人の中に天国がある。これはキリスト自身の告白ですから。彼は霊が貧しい。自分を何ものともしない。だから、キリストのことを、

「無者」

と申し上げている。「霊が貧しい」とは

「神一切、主さま一切、父なる神一切」

これが「霊が貧しい」ということ。「天国」即ち神様の支配し給うところ、その中にキリストは入っている。

「汝のものなり」

と。だから、私たちにとっては、

「恵福なるかな、汝、わが十字架によって、霊が貧しくされた者。天国すなわち聖霊の我れ汝のうちにあり」

と、こう響いてくる。絶対恩寵の世界です。

「恵福なるかな、わが十字架によって霊が貧しくされた、ゼロにされた者。天国即ち聖霊の我れ、汝のうちにあり」

と。これを、

「アーメン！」

と、受けとる。あのイエスさまの最初の一言はもの凄い十字架・聖霊の現実を言っていてくださるわけです。

語るも聞くも同じこと、私はあなた方と一緒に凄い世界に入っている。まぁ、福音書のキリストの言葉を読んでいてごらんなさい。ビリビリしちゃうから、その現実にいれられてしまって。

「汝らは世の光なり」

と。

「私がお前の中で光となるぞ」

ということです。

「そうですか、私はまだ光ではありません」

なんて、そんなことを考える必要はない。

「私はお前の中で光となるんだ」

「ありがとうございます」

と、その他に何もありはしない。絶対恩寵の言葉として受けとってくださいよ。福音書のキリストの言葉は凄いよ、全く。キリストの言葉だけではなく、行為も。

ヨハネ伝の最初の言、

「初めに言（ことば）あり」

を、ゲーテがファウストをもって、

「初めに行為あり」

と訳させた。さすがにゲーテだ。言即行の世界です。『ファウスト』の中に書いてある。

「行為は一切である」

という。ということは、私たちの信仰それ自身が全身的な行為です。信即行なんです。キリストの中に信じ入る、信入するんだ。キリストの中へ入らなければダメなんだ。こっちから

「信じています。キリストは贖罪してくださいました」

なんて、そんな命題を信じたってしょうがない。事実を受けとるよりかしょうがない。観念信仰というのはみんなそうです。

「頭で理解して、そしてそれが信仰だと思っている。冗談じゃない。そんなことで力がくるか」

というんだ。

それが私たちの上から来るところの「本願」を受けとるところの悲願、御意を受けとるところの悲願です。それは必ず成る。

だから、私は、あなた方は何も来月の十日を考えなくても今現にあなた方は素晴らしい世界に入ってらっしゃるから、楽しくてしょうがない。